

武蔵野日曜集会

オリーブの接枝

ロマ書第11章

1978年11月12日(武蔵野)

小池辰雄

劇的有機体的な構造 キリストは神さまの奴隷 十字架でキリストの義が与えられる 「十字架・復活・聖霊」の絶対恩寵 信仰は我々の中における神の業 善きことをなさざるを得ない恩恵の選び 樹の根 接ぎ木のミステリオン 万人はこれ罪びと 神より出で神によりて成り神に帰す 決定的なものはオリーブの油を注がれること

【ロマ11・1～36】

1 然れば我いう、神はその民を棄て給いしか、決して然らず、我もイスラエル人にしてアブラハムの裔^{すえ}ベニヤミンの族^{やから}の者なり。2 神はその預^{あらか}じめ知り給いし民を棄て給いしにあらず、汝らエリヤに就きて聖書に云えることを知らぬか、彼イスラエルを神に訴えて言う、3 『主よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、なんじの祭壇^{こほ}を毀ち、我ひとり遺^{のこ}りたるに、亦わが生命をも求めんとするなり』と。4 然るに御答は何と云えるか『われバアルに膝^{かか}を屈めぬ者七千人を我がために遺し置けり』と。5 斯のごとく今もなお恩恵^{めぐみ}の選びによりて遺れる者あり。6 もし恩恵^{めぐみ}によるとせば、もはや行為^{おこない}によるにあらず、然らずば恩恵は、もはや恩恵たらざるべし。7 然らば如何^{いか}に、イスラエルはその求むる所を得ず、選ばれたる者は之を得たり、その他の者は鈍くせられたり。8 『神は今日に至るまで彼らに眠れる心、見えぬ目、聞こえぬ耳を与え給えり』と録されたるが如し。9 ダビデも亦いう『かれらの食卓は罍^{わな}となれ、網となれ、躓^{つまずき}物となれ、報^{むくい}となれ、10 その眼は眩^{くら}みて見えずなれ、常にその背^{かか}を屈めしめ給え』11 然れば我いう、彼らの躓^{つまずき}きは倒れんが為なりや、決して然らず、反つてその落度によりて救は異邦人に及べり、これイスラエルを励まさん為なり。12 もし彼らの落度、世の富となり、その衰微^{おとろえ}、異邦人の富となりたらんには、況^{まじ}て彼らの数満つるに於てをや。

13 われ異邦人なる汝等にいう、我は異邦人の使徒たるによりて己^{つしめ}が職を重んず。14 これ或は我が骨肉の者を励まし、その中に幾許^{いくばく}かを救わん為なり。15 もし彼らの棄てらるること世の和平^{やわらぎ}となりたらんには、その受け納^いらるるは、死人の中より活けると等しからずや。16 もし初穂の粉潔^{きよ}くば、パンの団塊^{かたまり}



も潔く、樹の根潔くば、その枝も潔からん。¹⁷ 若しオリブの幾許の枝きり落とされて、野のオリブなる汝その中に接がれ、共にその樹の液汁ある根に与らば、¹⁸ かの枝に対して誇るな、たとい誇るとも汝は根を支えず、根は反つて汝を支うるなり。¹⁹ なんじ或は言わん『枝の折られしは我が接がれん為なり』と。²⁰ 実に然り、彼らは不信によりて折られ、汝は信仰によりて立てるなり、高ぶりたる思をもたず、反つて懼れよ。²¹ もし神、原樹の枝を惜しみ給わざりしならば、汝をも惜しみ給わじ。²² 神の仁慈と、その厳肅を見よ、厳肅は倒れし者にあり、仁慈はその仁慈に止る汝にあり、若しその仁慈に止らずば、汝も切り取らるべし。²³ 彼らも若し不信に止らずば、接がるることあらん、神は再び彼らを接ぎ得給うなり。²⁴ なんじ生来の野のオリブより切り取られ、その生来に悖りて善きオリブに接がれたらんには、況て原樹のままなる枝は己がオリブに接がれざらんや。

²⁵ 兄弟よ、われ汝らが自己を睨しとする事なからん為に、この奥義を知らざるを欲せず、即ち幾許のイスラエルの鈍くなれるは、異邦人の入り来りて数満つるに及ぶ時までなり。²⁶ 斯してイスラエルは悉く救われん。録して『救う者シオンより出で来りて、ヤコブより不虔を取り除かん、²⁷ 我その罪を除くときに彼らに立つる我が契約は是なり』とあるが如し。²⁸ 福音につきて云えば汝等のために彼らは敵とせられ、選びにつきて云えば、先祖たちの為に彼らは愛せらるるなり。²⁹ それ神の賜物と召しとは変わるることなし。³⁰ 汝ら前には神に従わざりしが、今は彼らの不順によりて憐れまれたる如く、³¹ 彼らも汝らの受くる憐憫によりて憐れまれん為に今は従わざるなり。³² 神は凡ての人を憐れまんために凡ての人を不順の中に取り籠め給いたり。³³ ああ神の智慧と知識との富は深いか、その審判は測り難く、その途は尋ね難し。³⁴ 『たれか主の心を知りし、誰かその議士となりし。³⁵ たれか先ず主に与えて其の報を受けんや』³⁶ これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり、栄光とこしえに神にあれ、アアメン。

●劇的有機体的な構造

ルターの有名な『キリスト者の自由』と『ロマ書註解の序文』という本がある。

「キリスト者は万物の主であつて、何者にも依存しない」

という。自主なる者、自由なる者。「自主」とか、「自由」とかいう言葉は、今は民主主義でよく使うわけですが、てんで分かつていない。また、

「キリスト者は万物の僕であつて、何者にも奉仕する」

という。この「自由、自主である」ということと、「僕である」ということ、この二つの矛



盾した概念。これがキリスト者であるという。これはパウロのローマ書の言葉から彼が引用して、それを土台にして言った言葉なんです。コリント前書9章19節とローマ書13章8節です。それを契機にして彼はこういう二つの命題を作ったわけです。

ルターという人は神学者ではありませんけれども、いわゆる組織神学者ではない。カルビンのように非常に組織的に、論理的にものを書いていない。聖書の註解の中、また自分の論説の中、そういったものはその時その時に言い放しになっている。それを自分で大きく組織的にまとめていない。それだけかえって彼は非常にドラマチックな劇的な、また有機的な構造を持っている。これが実は本当の神学だと私は思う。

パウロも書簡を書いているだけです。しかし、パウロというのはもの凄い構造を持っている。やはり、単なる思いつきではない。その時その時に言われているけれども、内側で大きな構造になっている。けれども、

「自主なるもので、何者にも依存しない」

と手放しで言えるかというわけです。ルターはこの二つの命題のうち一つ前提となる第一命題を言っていない。これは第二、第三なんだ。本当は大前提の命題があるはずだ。それは何かというと、「自主であり、奴隷である」というこの「自主」はどうして自主であるということが言えるかというと、これはこれ自身が実は「奴隷」でなくてはダメだ。これは

「キリストの奴隷、キリストの僕」

である。パウロはローマ書1章1節に、

「我はキリストの僕である」

とハッキリ言っているでしょ。キリストという絶対者の僕なんです。ところが、キリストはどうしたかというと、神さまの、これがまた僕なんです。「僕である」ということが実は、「自主」への土台になる。第二命題の方が本当は第一命題の土台になる。

●キリストは神さまの奴隷

キリストは「神さまの奴隷」なんです。「エホバの僕」ということがイザヤ書42章、49章、51章、53章でイザヤによって預言されている。「エホバの僕の歌」というところです。即ち、僕は主人の言うことを無条件に受けとって、そしてこれに従って行動するものが僕です。

「わが意志にあらず、汝の意志を成したまえ」

と、いつもキリストの祈りの一番中心は、

「わが意志にあらず、汝の意志を。あなたの御意が成るように、私を通して」

と。「自分を通して」とは聖書には書いてないが、これは本当に隠れた言葉である。キリストは自分を何者ともしない。だから、私はキリストのことを「無者」と言っている。自分を無私、何者ともしない。キリストは神の僕となって、絶対者と一つになっている。

「我と神とは一つなり」



と。自分が本当に神の中に投げ込まれているわけです。「下に」ではない。「の中に」です。神の中に投げ込まれている。このキリストには絶対的なものが、神の絶対性が来ている。だから、これは自主自由です。絶対的に自由です。本当の僕となれば自由なんです。自由だから僕ではない。自由が謙遜になつて僕になるのではない。ルターは「謙遜」という言葉をよく使っているが、この「謙遜」という言葉では、どうもまだちょっと足りない。ルターさんは徹底して言ってもらいたかった。

自分の意志がないから、神さまの意志が入ってくるんです。孔子の

「わが思うところ矩^{のりこ}を踰^こえず」

どころのさわぎではない。

「わが思うところは神に、神の思うところと即した」

ということ。神の思うところが我が思いだと。だから、

「私は何も自分で言っているのではない。神さまが言えということを書いてい
る。なぜということをしているんだ」

と。それだから、自由なんです。

今度は、我々はキリストの僕です。パウロはキリストの僕となつたから、パウロはどうですか。あの素晴らしい大伝道に展開していく。もの凄い力がくる。自分の自由に死んだから。

ルターはなぜ、「キリストの僕である」ということを真つ先に言ってくれなかったか。そうすれば、自主ということを書いて、それから、僕、隣人に対する僕ということが言えるんだ。せつかくこんな素晴らしい本を書いて、大前提を抜かしてしまって、ルターさんは惜しい。我々はパウロと同じように、キリストの僕なんだ。だから、本当に自由なんだ。何ものにもとらわれない。キリストにとらわれるということが、相対的な何ものにもとらわれないということなのです。

それは完全な平伏^{ひれふ}しなんです。「謙遜」なんていう言葉では言い表しきれない。平伏し、ぶつつぶれ、砕けです。では、どうして、そういうようにされたか。手放しでは、この僕にもなれない。僕にされてしまったのは、この十字架^{くわじやう}の贖^いいによるんだ。

●十字架でキリストの義が与えられる

「ゼルプスト・ズーフト」(Selbst-sucht 利己心、我欲)という、自我というものが立って困る。自我癖という、「我執」ということだ。これを佐藤繁彦先生が「自己追求」と訳しているが、これはあまり当てはまらないと思う。これは我執です。自己追求というのは、ある意味においては大事なことでないけれども。

我執という「罪」を全部背負って贖^いつてくださったのが十字架でしょ。相対的人間は、我々は、死に至るまで「罪びと」です。けれども、その奥に絶対的なものが来ているんだ、こ



のキリストの十字架を受けとると。だから、十字架を本当に受けとることによって「義とされる」、キリストの義が与えられる。

では、「義」とは何か。神さまを100%にして生きるときに、自分が無となるときに、神の無限無量なものがやって来る。神の意志を立てているというこの関係と、その神の絶対的な、神そのものとも言ってもいいような——それはもちろん量的には来ませんよ、質的にやって来る——そういうような内容が義なのであって、それを愛と言おうが、義と言おうが、一向差し支えない。しかし、義という言葉が、いかに正しい関係であるかということ言うために、愛と言うよりも義と言わなければならぬ。その義という正しい関係の中で、一番深い内容としては、何といっても愛ですよ、神の愛です。だから、義の中には愛がちゃんと含まれている。そういうような意味において、「義とされる」というのは、そういったキリストの義が私たちの中に与えられる。義が与えられる。

「義人は信仰によって生きる」

というのは、義とされた者は信仰によって生きるものであって、手放して義人なんてものはいやしないんだから。あれを間違えないでくださいよ。

「キリストの義をいただいた者が信仰によって生きる」

んです。プロテスタントの信仰が、なにかすると非常に観念的になっているから、とんでもない。キリストの神との関係とその内容が義です。それだから、「義人は信仰によって生きる」という。「信仰」というのは、キリストを受けとること。いつまでも仰いでいては困る。交わらなければダメです、霊的なキリストの交わりの中に入らなければ。交わりはどうして可能か。それは祈りの世界です。

●「十字架・復活・聖霊」の絶対恩寵

私は僕とされた。自分で偉そうな顔して僕に成ったのではない。キリストに降参した。降参したから僕になったんです。十字架の贖いと、それから復活の生命と、その復活の生命を聖霊でいただいたものだから。もうどうにもならないと。絶対恩寵です。それだから、全くこれは上からの恩寵に压倒されたわけです。「信ずるから、信ずる信仰だ」なんて、そんな体裁なものではないですから、信仰なんてものは、圧倒されて、キリストを受けとることだ。

「信仰の確かさ」とか「救いの確かさ」とかをよく問題にしているが、こちら側の信仰を当てにしたらそんなことは言えませんか、我々の側の信仰というものを当てにしたら。そんなものは当てにならないんだから。あなた方は自分の信仰が当てになりますか。私は、自分の信仰なんか当てにならない。「自分の信仰」なんていうものを当てにしているうちはダメだ。それはキリストの十字架と復活と聖霊のこの事実、そしてこれが現在に私たちに迫ってくるこの現実。この恩寵の事実が、この力の事実が、これが信仰の確かさなのであって、我々の側の信念とか信仰とか、これをどう受けとるかなんていう、そんな呑気な話ではないんだ。



だから、確かなんです。ざるを得ない。信ぜしめられている。信ぜざるを得ない。受けとらざるを得ないということ。どこへ行つて、一体その始末がつくんですか、キリストの外に。始末はつかないでしょ。キリストの中に来らざるを得ない。吸い込まれるように入ってしまう。そういう「ざるを得ない」ところの確かさというものを、なぜ言えないか。聖霊が来てないからです。本当に聖霊を受けとっていれば、この「ざるを得ない」がハッキリしている。

ところが、ルターのもので読むと、「こうしななければならない」とかいう言葉がたくさんある。なぜ、あんな言い方をするか。「ざるを得ない」となぜ言えないのか。あるいは、「こうである」ともつと断定して言ってもらいたい。もちろん、ルターはそういうところもありますよ。ありますけれども、非常に「ねばならない」というような言い方をしている。「ミュッセン」(müssen)というドイツ語は、「ねばならない」という意味と、「ざるを得ない」と二つあるが、しかし、この「ざるを得ない」ともつと断定的に言ってもらいたかった。

●信仰は我々の中における神の業

ルターは「神の言」ということを非常に言つたけれども、なぜ、そんな「言、言」とばかり言っているか。神さまの言の奥は霊の世界なんです。「キリストの言」というけれども、キリストは即ち、

「主は即ち御霊なり」(コリント後3・17)

と、パウロはコリント後書の3章で言っている。即ち、霊から発している言なので、

「わが言は霊なり、生命なり」

とキリストは言っているではないか。「意味ではないぞ」と——もちろん、意味もありますけれども——意味ではない、霊なり生命なりと。

それから、キリストがたくさんの人を癒したり、救ったり、死人を甦らせたり、湖の上を渡ったり、もの凄い行動をしているではないか。それは霊の世界が行に現われているわけです。言と行とを、「言うは易く、行うは難し」なんてやっているから、いつまでたっても始まらない。言も行も実は一つなんだ。現われ方が違っているだけの話で、大事なものはこの元だ。

人間はダメだから、言よりも行の方が難しい。必ずしもこれが霊から来ていない。現実の我々は罪びとだから。けれども、どんなにそれが惨めな行為であっても、霊から来ているのは本ものだ。ところが、どんなにそれが立派であっても、それが作られた行為なら、ちつともそれは結構な話ではない。むしろ偽善なんだ。

「偽善なるかな、学者、パリサイ人」

とキリストは言っているじゃないか。だから、言も行も実は一つなんだ。

ルターは信仰ということを非常に強調した。というのは、当時のカトリックは行為の面も非常に言うものだから。「信仰のみだ」ということを言っている。けれども実は、信仰そ



のものは内的な最も烈しい行だ。全存在を投げかけるような、そういった信仰そのものが行為なんだ。いわゆる派生的な行為の奥の一番根源的な行為が信仰なんだ。だから、私は「信仰一如」と言うんです。

ルターの『ローマ書序文』の中に、

「まことの信仰は我々の中における神の業である」

とある。この「神業^{かみわざ}」というのを皆いい加減にとっている。本当に「神業」と思っているか。「信仰は我々が信じている」くらいしか普通は思っていない。なぜ、「神業」かというと、さつきから申し上げている通り、キリストの十字架、キリストの復活、聖霊、これが全部、神の業です。この神業でもって我々は信ぜざるを得ないところに追い込まれた。信ぜざるを得ないところに追い込まれたことが、即ち全キリストという事態が、我々を信仰の世界に追い込んでしまった、追いつめてしまった。そういうわけだから、まさに神の業であって、もし我々の業であるならば、我々は自分の信仰にはもう絶望せざるを得ない。しょっちゅう波打っている。そんなものは当てにならない。

神の業であることを本当に受けとったら、もういくら波打ったって、波の奥の静かな世界を持っている。雲がいくらあっても、雲の上の成層圏を持っている。そういうようなことにならないければダメです。ところが、いわゆる霊的ななんていう人がしょっちゅうワッショイワッショイとやっている、そういうた部類の人があるが、そんなのはダメなんです。どうぞ、そういうことに決して惑わされないようにしていただきたい。

「本当の信とは、我々の中におけるキリストによるところの神の業である」

と。だから、我々はもう絶対に受けるほかにないんです。「求めよ」というのは、そのことを受けとるように求めるだけのなしだ。「求めるから、与えられる」という、あのキリストの言がへたすると躓きになるよ。

「私はまだ求めが足りないから」

なんて言ってるね、人間的な熱心が始まる。人間的な熱心は危ないですよ。しまいにくたびれてしまう。実は、上から与えようとしている本願の、劫力の方がもつとはるかに強い。だから、この求めは実に楽なんです。磁石の磁極に吸い付けられるところの磁鉄みたいなものですから。

●善きことをなさざるを得ない

これは名言だから私は言うんです。

「我々の中におけるところの、我々の中に起こってくるところの、その神の業だ。それは我々を変えてしまふ。そして、神さまから新しく生れさせるものである。」

そこでヨハネ伝1章13節を引用してある。それでもわるくはないけれども、そこではキリストが出てこない。むしろ、私は、ガラテヤ書2章20節をルターがここに引用してもらい



たかったと思う。

それは旧きアダムを、生来の我を殺してしまつて、

それは本当に私たちを殺してしまうですよ。「もはや我れ^わ生くるにあらず」とハッキリ言えなくてはダメです。「我」はあいかわらず生きてますよ。生きてますけれども、「もはや我れ生くるにあらず」ということを、このキリストを受けとつたら、ハッキリ言えなくてはダメなんです。また、言えなくては力が来ない。

「あいかわらずまだ生半可に生きているではないか」

なんて。ああそうだろう、それは罪びとだから、死にいたるまで。そんなことで相対的な我をなぜ気にしているかと言いたい。そうすると、まだ義、認、聖、化の問題があるけれども、今はよしとおこう。そういうことを学者というのは頭でもって一生懸命で分析しているよ。気の毒になる。

心と心情と思いとあらゆる力において、私たちを全く別な人間にしまつて。

と。確かに幻滅は来ます、人間は二重構造ですから。そうであっても、あいかわらずダメなものもあります。ダメなものがなくなつたなんて言うのと、それは偽りです。

そして、聖霊をもたらすものである。

ルターはここで「聖霊をもたらす」とハッキリ言ってくれたのは非常に結構なことです。聖霊のことを言わなかったらダメです。全く別な人に引っくり返すのは、この聖霊が来なければ、引っくり返らないからね。

信仰とはなんと生き生きした、また作用的な活動的な力あるところのものではないか。

信仰はそんなもの凄じ上からの力でもって生き生きとしたものであるから、

間断なく善きことをなさざるを得ないようなわけだ。」

と。そのあとにドイツ語で、「なさないことは不可能である」と書いてある。もうそれは内側の生命が溢れて、善き行動に出ざるを得ないと。しかし、その善き行動は、人間はいかに跛行的^{はこう}であるかということも、もちろん言えるんですけれども。しかし、とにかくそこに出てくるところの行動は本ものだ。信仰から出てないものは、どんなに立派そうにみえても、それはうそのものだ。

道徳的にもカントはそこから言っている。

「善き意志から発しないところのものは、どんなにそれが立派にみえてもダメだ」

ということとはカントが言っている。それは道徳的とは言えないと。あのカントの道徳哲学はこのルターのこういうところから来ている。それはもう、ルターがなければ、カントもゲーテもないと言つてもいいくらいだ。なにしろドイツ語を彼は作つたんだからね。そういうようなことで、非常に大事なことですから、皆さんに申し上げたわけです。



●恩恵の選び

それではローマ書に入りましょう。11章です。

1 然れば我いう、神はその民を棄て給いしか、決して然らず、

10章でパウロが今のユダヤ人の在り方を批判している面があるものだから、前の10章を受けとって、異邦人の方に福音が臨んできたから、イスラエルの民を神さまは棄ててしまったのか。そんなことは決して起こることではないんだと。

我もイスラエル人にしてアブラハムの裔ベニヤミンの族の者なり。

「ベニヤミン」という十二支派の種族があつて、パウロはあのベニヤミン族の直系、生粋のユダヤ人なんだ。「私はユダヤ人だが、とうとうキリストに捕まって、棄てられたのではないではないか」と。

2 神はその預^{あらか}じめ知り給いし民を棄て給いしにあらず、
ユダヤ人は十分顧みられてゐるんだぞと。

汝らエリヤに就きて聖書に云えることを知らぬか、

あの預言者エリヤですね、イスラエルの中興の預言者です。

彼イスラエルを神に訴えて言う、3 『主よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、
なんじの祭壇を毀^{こぼ}ち、我ひとり遺^{のこ}りたるに、亦わが生命をも求めんとするなり』
と。

忠実なるイスラエル民族として自分は遺つてゐるのに、この私の生命をも求めようとして
いると。これは列王紀略上19章に出ています。

4 然るに御答は何と云えるか

「御答」というのは神託的な神の言です。

『われバアルに膝を屈^{かが}めぬ者、七千人を我がために遺^{のこ}し置けり』と。

即ち、遺れる民、信仰を貫く者が遺つてゐるんだと。

5 斯のごとく今もなお恩恵^{めぐみ}の選びによりて遺れる者あり。

この「恩恵の選び」という言葉は大事な言葉です。「遺^{のこ}れる者」というのはイザヤがよく使つた言葉です。イザヤ書6章から出てます。選ばれたのは、こつちが何か資格があるからではない。恩寵の選びなんですから。こちらは無資格でダメなやつ。神さまはむしろダメな者を選ぶ。コリント前書1章の終りの方に出ている通り。そういった恩寵の選びによつて遺つてゐる者があるんだと。

6 もし恩恵^{めぐみ}によるとせば、もはや行^{おこな}ひによるにあらず、
こちら側の行為によつてはいない。

然らずば恩恵は、もはや恩恵たらざるべし。7 然らば如何^{いか}に、イスラエルは
その求むる所を得ず、選ばれたる者は之を得たり、

イスラエルはその不信のためにこの本当のものを得なかつたが、選ばれたる者はこれを得



たと。

その他の者は鈍くせられたり。

今、私が「不信」と言ったのは、この「鈍くせられたり」ということです。

8 『神は今日に至るまで彼らに眠れる心、

「眠れる心」というのは「麻痺した霊」という字です。

見えぬ目、聞こえぬ耳を与え給えり』と録されたるが如し。

「聞けども聞こえず、見えども見えず」とイザヤ書29章10節、申命記29章4節にある。

9 ダビデも亦いう『かれらの食卓は民となれ、網となれ、蹟物となれ、報となれ、

10 その眼は眩みて見えずなれ、常にその背を屈めしめ給え』

ということをダビデも言っている。これは詩篇69篇です。

11 然れば我いう、彼らの蹟きは倒れんが為なりや、

「倒れんが為ならずや」と言ってもいいですけども。

決して然らず、

そういうわけではない、倒れんがために蹟いたのではないと。

反ってその落度によりて救は異邦人に及べり、

その蹟きによつて救いは異邦人に臨んだ。即ち、ユダヤ人は律法に蹟いているし、信仰に蹟いているから、そのために救いが異邦人に来てしまった。私はその異邦人に救いをもたらすところの使徒である、というわけです。

●樹の根

これイスラエルを励まさん為なり。

「励ます」は「パラゼロス」という字で、「イスラエルに神に対する熱情を起こさんがために」という意味です。

12 もし彼らの落度、

即ち、彼らの不信行為が、

世の富となり、

この場合の「富」というのはキリストを持つことです。

その衰微、異邦人の富となりたらんには、況て彼らの数満つるに於てをや。

これは反語的に言っているわけです。

13 われ異邦人なる汝等にいう、我は異邦人の使徒たるによりて己が職を重んず。14 これ或は我が骨肉の者を励まし、その中に幾許かを救はん為なり。

異邦人の使徒となるのは、逆に彼らが「これはいかん」と思つて熱心を起こして、救いを持っていくためだ。この「熱心」という字は「妬み」と同じ字です。

15 もし彼らの棄てらるること世の和平となりたらんには、



イスラエルが棄てられることが世のやわらぎとならんためには、

その受け納^いらるるは、死人の中より活くと等しからずや。

受けいれられるようになったらば、この棄てられたイスラエル人は死人の中から生くと等しくなつて、非常な喜びとなるじゃないかと。だから、今棄てられたりしていても、それで失望するなど。こういうことを一生懸命で言おうとしているわけです。

¹⁶もし初穂の粉^{きよ}潔くば、

「初穂」はユダヤ人ですから。

パンの団塊^{かたまり}も潔く、

「パンの団塊」というのはこの場合は、イスラエルの全体のことを本質的に言っているわけです。初めのかたまりが潔ければ、即ち、イスラエルの祖先——アブラハム・イサク・ヤコブ——そういった元が潔ければ、イスラエルのパンのかたまりも潔く、

樹の根^ね潔くば、

これも「樹の根」というのは、イスラエルの民が他の民に対して「樹の根」のごとく選ばれているから。

その枝も潔からん。

その枝もまた潔いはずだ。かたまりも潔いはずだし、枝も潔いはずなんだと。

¹⁷若しオリーブの幾許^{いくばく}の枝きり落とされて、野のオリーブなる汝^{なれ}その中に接がれ、

共にその樹の液汁^{うるおい}ある根に与^{あずか}らば、¹⁸かの枝に對^{むか}いて誇るな、

「野のオリーブなる汝」というのは異邦人の方だ。「オリーブ」はイスラエルのことを言っている。そのいくばくかの枝が切り落とされて、即ち、不信のために捨てられて、そして、野のオリーブなる汝、異邦人がこのイスラエルの遺れる者に接がれたときに、共にその樹の液汁^{うるおい}にある根にあずかれれば——即ち、イスラエルの本来の神の選びの民の遺れる民が根っこになつていますから——それにあずかれれば、かの枝にむかいて誇るなど。即ち、異邦人は切り落とされた枝にむかつて誇るなど。

たとい誇るとも汝は根を支えず、

根が、イスラエルが支えているのであつて、

根は反つて汝を支うるなり。

そういう関係だから、どこまでもイスラエルがもとなのであつて、棄てられたからといって決して本当に棄てられたわけではないということを言っているわけです。けれども、異邦人を救おうとして、これを棄てて接ぎ木しているんだと。

●接ぎ木のミステリオン

それがこの譬話なんです。オリーブはもちろん灯油にも使うし、香油にも使うし、外科のことに使うし、食べるにも使うし、あちらでは非常に役に立つ木です。パウロのこの



オリブの譬えが果たしてオリブの実際の栽培のためにどれだけ本当であるかはまた別問題ですけれども。

19 なんじ或は言わん『枝の折られしは我が接がれん為なり』と。20 実に然り、彼らは不信によりて折られ、汝は信仰によりて立てるなり、信仰によつて根に、古い幹に接がれることになったと。

高ぶりたる思をもたず、反つて懼れよ。
この憐れみにあづかつたから懼れなさいと。

21 もし神、原樹の枝を惜しみ給わざりしならば、汝をも惜しみ給わじ。22 神の仁慈と、その厳肅を見よ、

この「仁慈」と「厳肅」ということ。我々が恩寵にあづかっていることは、責任を持っている。また、本当に畏れをもつて、いよいよ平伏していく。

十字架を土台にしているこの恩寵、十字架の贖いに対しては、我々は本当に感謝と畏れを持つてゐるわけです。平伏しを持つてゐる。十字架の恩寵にあづかつて、これを意識しているかぎり決して傲慢にはならない。聖霊がやつて来て、聖霊の力が来るものだから、

「俺はだいたい霊的になつた」

なんてやつたら、とんでもない話だ。そんなものはヘタすると、十字架がなくなると、サタンの霊に切り替わる。傲慢はサタンの霊ですから。だから、

「神の仁慈と、その厳肅を見よ」

と言う。「仁慈」という字はいわゆる「恩恵」という字とちよつと違う。

「8 汝らは恩恵により、信仰によりて救われたり、はおのれに由るにあらず、

神の賜物なり」(エペソ2:8)

というエペソ書2章8節と同じようなわけです。

厳肅は倒れし者にあり、仁慈はその仁慈に止る汝にあり、若しその仁慈に止らずば、汝も切り取らるべし。

恵みにあづかつて、その恵みを本当に受けていなかったら、また切られてしまうぞと。

23 彼らも若し不信に止らずば、接がることあらん、

また接がれることもあるだろうと。

神は再び彼らを接ぎ得給うなり。24 なんじ生来の野のオリブより切り取られ、その生来に悖りて善きオリブに接がれたらんには、

「生来の野のオリブ」というのは異邦的な世界です。それからこの福音の世界に入れられることが、接ぎ木されるということです。

況て原樹のままなる枝は己がオリブに接がれざらんや。

もちろんその通り、異邦から接がれるなら、元の木から切られたものはまたすぐ接ぎ返すことができないことはない。どこまでもユダヤ人を優先的に考えてゐるわけだ。



25 兄弟よ、われ汝らが自己^{みづから}を聡^{さと}しとする事なからん為に、この奥義を知らざるを欲せず、

この接ぎ木のミステリオン（奥義）を知らないことを欲しないと。

即ち幾許^{いくばく}のイスラエルの鈍くなれるは、異邦人の入り来りて数満つるに及ぶ時までなり。

異邦人がもうこれで救いが全くなつたら、今度は最後にイスラエル人が救われる。それまでののはなしだと。けれども、パウロは、世の末が近いからこういうことを言ってますけれども、イスラエルはむしろ部分的ではなく、大いに全体的に、かなり大部分がキリストを棄ててしまった。それから、異邦人も大部分がなかなか受けとらない。だから、本当に接ぎ木されるものは非常に少ない。我々は接ぎ木されたわけけれども。そういった、接ぎ木されるものがどつちみち常に少ない。

●万人はこれ罪びと

26 ^{かく}斯してイスラエルは悉^{ことごとく}とく救われん。

なんてなわけにはいきませんよ。異邦人をことごとく、万人救済の本願は、神さまはお持ちだけれども、万人救済まではなかなかいかない。「末の世に信を見んや」と、キリストはむしろ非常に悲観的にみている。そして、最後の審判が黙示録にあるようにやつて来る。

録して『救う者シオンより出で来りて、ヤコブより不虔を取り除かん、²⁷我

その罪を除くときに彼らに立つる我が契約は是なり』とあるが如し。²⁸福音につきて云えば汝等のために彼らは敵とせられ、

神に敵とせられ、

選^{えら}びにつきて云えば、先祖たちの為に彼らは愛せらるるなり。

神に愛せられるのであると。

29 ^{たまもの}それ神の賜物と召しとは変わることなし。

これは大事です。「賜物」は「カリスマータ」です。神の霊的な賜物のことをいう。神の賜物と召しとは変わることがないと。「召し」（英コリーング）は「クレーシス」という字です。

30 汝^{きみ}ら前には神に従わざりしが、今は彼らの不順によりて憐れまれたる如く、

31 彼らも汝らの受くる憐憫^{あわれみ}によって憐れまれん為に今は従わざるなり。

まあパウロの論理というのはおもしろいよ。

32 神は凡ての人を憐れまんとために凡ての人を不順の中に取り籠め給いたり。

この32節は大事な節です。相対的には、背いたり、接ぎ木されたり、いろいろあるさ。けれども、もうひとつ奥の世界に行くと、

「神は凡ての人を憐れまんとために凡ての人を不順の中に取り籠め給いたり」

と。すべての人は罪びとになつてしまつていて。「不順の中」ということは——神さまに對



して、

「汝の御意をなさせたまえ」

と言って挺身しているのが「順」なんです。順したがうんです。ところが——それでないのが「不順」というやつで、この「不順」というのが「罪びと」ということ。ミルトンが、

「人間の最初の不従順が楽園喪失にしまった」

というわけで、あの「パラダイス・ロスト」という大きな詩を書いたでしょ。

「万人はこれ罪びとだ」

ということ、不順なんだ。キリストだけが順なんだ、

「十字架の死に至るまで順したがい給えり」

という。

「神は凡ての人を憐れまんだために凡ての人を不順の中にとじこめた」

と。ということは、凡ての人を何で憐れむかというのと、申し上げているとおり、十字架があります。キリストの十字架によつて、贖罪によつて。これが究極的な憐れみですから。「とじこめ給えり」と、神さまがやったように書いているけれども。もちろん、人間の不従順が原因ですが、その中に閉じ込めたままにしておいたというわけです。

●神より出で神によりて成り神に帰す

³³ ああ神の智慧と知識との富は深いかな、

神のこの救いの摂理、道というものは本当に極めがたいと。非常にドラマチックなものです。「智慧と知識」「ソフィアとグノーシス」はこの場合、「ソフィア」(智慧)の方を「グノーシス」(知識)よりも深くとっている。普通は、「グノーシス」という言葉を相当深くとるわけだけれども。

その審判さばきは測り難く、その途みちは尋ね難し。

神の審判もその途も尋ねがたい。だから、我々としては、「信ずる」「受けとる」というほかにないわけです。どんなことにでつくわしても、その奥に神の本当の憐れみと深い御意があるということを受けとつていかないと、それが本当の信なので、現象面で動いてはダメだ。現象面で動いたら、これは御利益宗教になる。

³⁴ 『たれか主の心を知りし、誰かその議士はかりびととなりし。

これはイザヤ書40章の有名な言葉だ。

³⁵ たれか先ず主に与えて其の報むくいを受けんや』

無限無量の神の御意の内容ですから、そんなものをもし推し量られたり、人間の心でもって分かったら、それは神さまではない。分からないのが本当なんです。分からないから、受けとつていくと、信じていくと、今度はそこから非常な明知が出てくる。これは妙なものだね。分からないものの中に入って、そして無条件に受けとつていくと、そこら



んな力だの、智慧だのが出てくる。だから、神の中に無条件に入ることです。測りがたき無限無量なものがそこから出てくる。

36 ^{すべ}これ凡ての物は神より出で、神によりて成り、神に帰すればなり、
有名な言葉です。

栄光とこしえに神にあれ、アメン。

もう最後は、パウロさんはすっかり祈りの讃美の世界に入ってしまったている。だから、

「一切のものは神から出て、神によりて成り、神に帰する」

というわけだ。その「神より出で、神によりて成り」という、この「よりて」のところにキリストがあるわけです。そこではキリストが働いている。それで成っていく。そして神に帰する。これは手放しの神ではないですよ、その「よりて」のところは。

要するに、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、選びが先であろうと後であろうと、そんなことは大したことではない。問題は、それらがもはやキリストにあつては、ユダヤ人も異邦人もないとパウロが言っているでしょ。男も女もないと言っている。「ない」ということは無差別ということではないですよ。それは絶対的な恩寵の世界では、そんなことをどうのこうのと言っている世界ではないというわけです。

●決定的なものはオリーブの油を注がれること

オリーブの接ぎ木というのはそういうわけです。我々の信仰生活で、信仰の段階にも接ぎ木があるんだよな、いろいろ。接ぎ木と言いますか、新しい養分と言いますか、それでだんだん展開していく。一番大事なのは、信仰の段階で一番決定的なものは、これはいきなり来る人もあるけれども、結局、聖霊の問題です。聖霊の枝が入ってくると、聖霊の枝が接ぎ木されると、今度は幹も変わってくる。それくらいに、我々はキリストの霊を受けると、我々を木に譬えれば、全体が、木そのものが全然生き生きとしたものになってくる。このオリーブの接ぎ木のように、オリーブの油を——「油注がれたる者」というのは、オリーブの油を注がれたる者のこと。「オリーブの油」というのは聖霊のことをいう。新約でもそういう言い方をしている、ヨハネ書簡の中にも書いてある——オリーブの油をもつて譬えられているところの、この聖霊を注がれる。聖霊を注がれたら、今度は本当に我々の全存在が、確かに生きが違ってくる。人に対しての本当の愛、力あるところの愛、担いの愛、それから智慧、いろんなことをしているその業、それらに自在な展開をしていきます。オルガンを弾けば、オルガンの弾き方が違ってくる。ソロバンをはじいていけば、ソロバンののはじき方が違ってくる。とにかく、何であろうとも、そのやっていることに對して御霊が働く。これはコリント前書の12章、14章で書いてあるとおりです。

この「オリーブの接ぎ木」と同時に、我々はもう一つ思わなければならないのは、今度は「オリーブの油を注がれる」ことです。お互いの相対的現実では、接ぎ木的な役割を果たして



いいですよ、お互いの相対的な面で。

「あの人が来たものだから、私はこういうわけで非常にうまくなってきた」
と、人助けになる。それが一種の「接ぎ木」だけれども、決定的なものは、接ぎ木ではなくて、オリーブの油を注がれることです。即ち、聖霊を受けること。そういうことが、お互いの信仰において、信仰生活の友情関係において互いに助け合い伸ばしあつていく。祈りをもって助け、そして聖霊を本当に受けて、深くこの聖霊を土台にして展開していく。こういうことであります。

